鶴彬通信 はばたき

第36号
2020年11月20日
鶴彬を顕彰する会

もくじ

②～⑤面　碑前祭と墓碑法要
⑥～⑪面　鶴彬川柳大賞
⑫～㉓面　宇部功氏講演と特別授業の感想文
㉔～㉗面　鶴彬交流の広場
㉘面　二〇二一年度年度事業活動方針（案）

新型コロナが収まらない中で 3つの行事を行った

第25回　鶴彬川柳大賞

2020年　墓前法要

2020年　碑前祭

①第二十二回鶴彬をたたえる集い／碑前祭

九月十三日（日）午後一時より高松歴史公園句碑前において、約三〇名の方々が集まり高橋成典さんの司会で始まった。まず金田平夫会長より挨拶があり次に親族を代表して甥の喜多義教さんが挨拶、続いてかほく市油野和一郎市長からのメッセージが副会長の板坂洋介さんより代読された。集いには盛岡と大阪の仲間からもメッセージが寄せられた。

②第二十五回鶴彬川柳大賞発表

メッセージの披露に続き、かほく市川柳協会会長小山広助から第二十五回鶴彬川柳大賞の発表があった。今年は選者も一新し、全国応募を展開した結果二百二十七名の応募があったとの報告がなされた。席上、大賞一句と優秀句三句が読み上げられた。この後、額装の贈呈式が行われた。書家の中野紫楊様の他、寄贈に尽力された安田桂子様も臨席し金田会長に額装が手渡された。続いて高松吟詠会会長竹田求氏による献吟がなされた。最後に参加者全員による献花と記念写真撮影があった。

③第三回鶴彬墓碑法要の集い

碑前祭終了後、会場を浄専寺境内に移し午後二時三〇分より墓碑前で法要が営まれた。読経の中、集まった約四〇名の方々による焼香と平野喜之住職の感話があった。法要後のイベントとして講師に寺本親平氏を迎え講演会を開催した。思いの他難解なお話だったような気がした。閉会は四時二〇分無事終了した。

第22回 鶴彬をたたえる集い
碑前祭 ―中野紫楊さんの書　贈呈式―

■日　時　２０２０年９月13日（日）開会
　　午後１時半～２時
■場　所　高松歴史公園句碑前

九月十三日、風もあり小雨の降りそうな天気の中、石川県かほく市高松歴史公園で鶴彬をたたえる集い（碑前祭）を行いました。二十六人が句碑前で遺徳をしのびました。

川柳祭などは新型コロナウイルスの影響で中止になりましたが本年度の鶴彬川柳大賞の作品などが来場者に配布され、鶴彬大賞をはじめ秀句・佳作の短冊が会場に展示されました。

高橋成典さん（かほく市議・顕彰会幹事）の司会のもと、金田平夫顕彰会会長があいさつ。鶴彬のおい、喜多義教さん（顕彰会幹事）は毎年継承する会が市内小学校で鶴彬の特別授業を行っていることを例に「戦争の悲惨さや平和の大切さを幼い時期から伝えていきたい」と話していました。かほく市長のメッセージが読み上げられ、小山広助さん（かほく市川柳協会会長・顕彰会事務局）は、鶴彬大賞をはじめ秀句・佳作を読み上げました。

続いて金沢市の書道愛好家中野紫楊（由美子）さんから鶴彬の句**「暴風と海との恋を見ましたか」**（平成22年度・第62回　毎日書道展入選作品）をしたためた書の寄贈式がありました。そこで、「はばたき」35号の訂正ですが、安田桂子さんが書を寄贈とありましたが、正確には寄贈者は中野紫楊さんです。安田さんはこの作品を見たとき、「鶴彬にぴったりの書だな」と感じました。最近になって中野さんに「あの書、今、どうなっているの？」と聞いたら、中野さんは「押し入れの中にしまってある」と言うので、安田さんが「それはもったいないから、額装は私が責任もってしますので、鶴彬の資料館にただでいただけんけ」とお願いしたところ、中野さんは快く「どうぞ」と承諾されました。中野さんは「鶴の映画を見てその人生に感銘を受け、句を書にした。押し入れの中に眠っていた作品が、みなさんに見ていただけるのはうれしい」と話しました。高松吟詠会の竹田求さんにより**「暴風と海との恋を見ましたか」**の吟詠が読み上げられました。作品は資料館の目立つところに、大切に飾る予定です。

最後に、竹田さんにより**「枯芝よ　団結をして春を待つ」**の吟詠があり、来場者は句碑の前で献花しました。

親族代表あいさつ

鶴彬を顕彰する会幹事・親族代表　喜多　義教

本日は鶴彬の碑前祭に、多勢の方々にお集りいただき、誠にありがとうございます。親族を代表して一言ごあいさつ申し上げます。

鶴彬が東京の中野署で拘束され、獄死してから82年になります。敗戦から75年の間日本は平和を満喫してきましたが、昨今の情勢を見ますと、アメリカ、中国、北朝鮮など力の誇示を競い合って、どんどんエスカレートしています、ブレーキの効かない車のようです。日本もまた憲法改正だの自衛隊法だのと、なにかきな臭さを感じる今日であります。

今年は新型コロナ禍のもとでもあり、実施できませんでしたが、これまで私たちは鶴彬の悲劇と、あやまちを繰り返さないために、毎年盛岡から、宇部功先生をお招きして「鶴彬に学ぶ平和」の特別授業を市内の小学校で実施してきました。また、市民川柳を募集して小、中学生からたくさんの作品が寄せられました。戦争の悲惨さ平和の大切さを、幼少期からうえ付けていかねばと思います。子供たちの感想文や作品を読むと痛切にそれを感じます。こうした運動をもっともっと広げて、又続けていければと、思うところであります。

本日はありがとうございました。

第22回鶴彬をたたえる集いに寄せられたメッセージ

かほく市長　油野　和一郎

本日ここに、「第二十二回鶴彬をたたえる集い」が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

皆様ご承知のとおり、新型コロナウイルスによる感染症の発生・拡大は、わたくしたちの暮らしに大きな影響を及ぼし、様々な社会活動が制限される状況となっております。

そのような中にありながらも、本日の尊い集いを迎えられた関係各位のご尽力に敬意を表すものであります。

風刺やユーモアによって、社会不安を克服する反骨精神こそ、まさに川柳の真骨頂であり、生きる力に繋がるものであると思います。

本年一月、うみっこらんど七塚の「海と渚の博物館」内に、「かほくふるさと展示室」をオープンいたしました。その中で、かほく市の偉人として鶴彬を取り上げております。市といたしましても、ぜひ、市内外問わず、多くの方々に知っていただければと願っているところでございます。

本日の集いが、鶴彬の遺徳をしのび、平和の尊さを希求する場として、意義ある集いとなりますよう心よりご祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

令和二年九月十三日

第四十四回鶴彬・井上剣花坊祭

実行委員長　佐藤　岳俊

第22回鶴彬をたたえる集いに参加された皆さんご苦労様です。

現在安倍内閣は首相の病気として辞任しましたが、これは多くの悪法を作り国民の首を締めつけてきた安倍首相に行き止まりの法を国民が投げつづけた結果です。

しかし次の首相も安倍の先兵ですので油断はできません。

平和憲法の下75年の中で、鶴彬が叫びつづけたその平和の意志を共に語り行動して行きましょう。

二〇二〇年九月十三日

あかつき川柳会会長　岩佐　ダン吉（鶴彬顕彰事業基金）

コロナ禍の為、全国の仲間・柳社が一堂に会しての川柳作品の発表の場を奪われ半年余となりました。

安倍自公政権の対応は天災を「人災」に変え、ついには病気を理由に総理は退陣する事態となっています。

あかつき川柳会は「鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かし―」（会則）の会です。

獄中にあっても不屈の川柳を詠んだ鶴彬に学び、多くの柳社が句会の中断の中でも即座に「誌上句会」に切り替え〝戦あかん、暮しと民主主義を守る世論を川柳で〟と奮闘しています。

鶴彬獄死のこの日、石川、岩手、東京のご健勝を祈念し連帯のメッセージとします。

令和二年九月十三日

第二回　鶴彬墓碑法要の集い

■日　時　２０２０年９月13日（日）開会
午後２時半～３時

■場　所　浄専寺

■催　し　講演（寺本親平氏）
演題「傑僧　任誓」―任誓一代記―
２０２０年９月13日（日）開会
午後３時10分～４時半

午後２時半から浄専寺境内の墓碑前において、浄専寺平野喜之住職の読経に続き、参列者約30名全員焼香し鶴彬を偲びました。法会にあたり、住職より感話がありました。

感　話（平野喜之住職）

この鶴彬のお墓の後ろの壁に貼ってあるパネルのとおり、一昨年、盛岡市の光照寺から、鶴彬の遺骨の一部がこの浄専寺の境内に移され、一昨年の御命日に鶴彬墓前法会が勤められました。今年はその法会の第３回目になるわけです。光照寺でも毎年、鶴彬を語る盛岡の会によって、９月14日には墓前祭が行われているということです。

隣の句碑は、鶴彬の最後によんだといわれている　**胎内の　動き知るころ　骨がつき**です。この句碑は今からもう11年前、２００９年３月に没後70年を記念して建立されました。この句碑の文字は、皆さんもご存じの通り神山征二郎監督です。この句も神山

監督が選んでくださいました。

神山監督は言うまでもなく、映画『鶴彬こころの軌跡』を制作してくださった監督です。監督は映画の撮影期間、ずっと浄専寺に宿泊してくださって、その時のことを思い出すと懐かしいです。ただ私が一番印象深いのは、その頃ではなく、今から3年前のことです。

２０１７年10月に香林坊の石川県教育会館で「今、鶴彬から学ぶこと」というテーマで、シンポジウムが開かれました。鶴彬を顕彰する会からは、司会として寺内徹乗さん、パネリストとして私が参加しました。そのシンポジウムの打ち上げは、河北亭でありました。その打ち上げの席で、ある参加者が、鶴彬を反戦川柳作家と限定するのには違和感がある、といった趣旨のことを言われました。その意見を受けて、神山監督は鶴彬を「愛の人」と言い当てられました。そのことが一番、私の印象に残っています。

鶴彬は「愛の人」だった。しかし、その当時の、いや、今もそうかもしれませんが、戦争に突き進んでいく国家の在り方は、愛とはかけ離れたものだった。だから、鶴彬が「反戦」川柳作家であることには違いない。

しかし、それだけだと、たとえば、**「都会から帰る女工と見れば病む」**であるとか、**「ヨボと辱しめられて怒りこみ上げる朝鮮語となる」**といったような、社会的弱者に向けられた鶴彬の愛のまなざしを見落とすことにもなり兼ねないでしょう。

当時、国策に従わない人は情け容赦なく切り捨てられた。だから愛の人鶴彬は、切り捨て国家に怒りを感じ、衝突せざるを得なかった。共産主義者、反国家主義者として国家とぶつかったという面ももちろんありますが、それらもみな、愛の人として生きようとした結果、愛のない国家と衝突したわけです。

私たちが鶴彬を顕彰する場合、何を顕彰するかということが大事だと思いますが、神山監督の言われる「愛を生きた人」として顕彰することが大事だと思います。

もう何か月前にもなりますが、テレビを見ていた父が言いました。「これではまるで戦中と同じだ。あの頃とまったく変わらない」と。父が見ていたテレビの画面を見ますと、番組では、都会から田舎に帰省した人たちがいる家に中傷のビラが入れられたり、コロナに感染した者がいる家に「コロナ、出ていけ」という落書きがあったり、また医療従事者に対しても嫌がらせや誹謗中傷があると言うことを取り上げていました。医療従事者の中には、家に帰らずに宿をとってそこから通ったり、コロナ感染者が出た家が、近所の誹謗中傷に耐えきれずに引っ越したりすることもあるとも放送していました。戦中の言葉でいうと、「非国民、出ていけ！」と言って、落書きされたり、石を投げられたりするようなものです。それを父は「これではまるで戦中と同じだ。あの頃とまったく変わらない」と言ったのでしょう。

鶴彬が戦ったのは、国家権力だけでないと思います。国家権力だけではなくて、鶴彬が戦ったのはこういう愛のない行為と戦ったのだと思います。感染を恐れなければならないのは、コロナだけではありません。こういう「愛のない心」「コロナ感染者や医療従事者に対する誹謗中傷する心」の感染を恐れなければなりません。そして、感染するなら、鶴彬の「愛の心」に感染しなければなりません。別の言い方をすると、恐れなければならないのはコロナだけではなく、我々の心に潜む人を差別する心です。そしてコロナは排除しても、人や店を排除してはいけません。クラスターが発生した店こそ、いま最も安全ではないでしょうか？

鶴彬にならって、最後に川柳を一つ。

クラスター　起こした店は　いま安全

第3回「鶴彬墓碑法要の集い」に寄せて

寺本 親平（青嶺）

鶴彬の琵琶歌に続いて、今度は任誓という傑僧のことを小説仕立てした「任誓が往く」という本を上梓し、又しても琵琶歌にした次第です。鶴彬（喜多一二）と任誓（与三郎）には、類似点が幾つかあります。両親との縁が薄いこと。聡明で一本気な強い反骨心。妻子を持たず、一所不住であること。こういう人物は為政者にとっては最も厄介な存在であります。この二人の心底にあるものと云えば、民衆に対する労りの心情でしょう。鶴彬は軍国主義を非難し揶揄する苛烈な、一千を超える川柳と九十点余の評論・自由詩を遺し、任誓は「農民鑑」という書物を著して、民百姓が生きる指標としました。鶴彬は官憲に捕縛され、獄中で殺されたと云っても過言ではないでしょう。一途で痛ましい印象がありますね。片や仁誓はと云えば、顕著に宗教問題を有するだけに、事は別の様相を呈します。任誓が著した『農民鑑』を繙くに、「夢幻の身を以てよく耕して夢幻の身を養いて、夢幻の身を厭う。なすところ夢幻にして、不思議の法門に入るときは実相を証るべし。耕すもこのため、勉るもこのためなり。豈身を粉にして骨を砕きて耕さざらんや」とあります。夢幻の身とは言いかえれば、絶望の淵、悲嘆の極みと云うことでしょう。実相とはその艱難の坩堝のなかへ、忽然として飛びこんでくる弥陀の光明のことであります。弥陀の名号を称えるその瞬間、浄土が信心においてこの苦界に開かれてくるのです。そのとき、心は歓喜に満ち溢れるのです。任誓はこの親鸞聖人から蓮如上人へと繋がる真宗の本願を胸深く修め、それを衆生へ拡めていく布教一筋に日々励んだことでしょう。如来が願を起こして浄土を荘厳し、衆生を彼国へ往生せしめる如来の廻向を「往相廻向」と云い、無碍自在の大悲によって、あらゆる衆生と共に此国に於いて彼国への道を歩ましめる（はたらき）を「還相廻向」と云う。これは浄土門の大要なのです。この度改めて詳しく、富山のある御住職からそのことを教わりました。鶴彬との共通点である獄死という言葉だけに惹かれて、任誓の心底にある最も肝腎なことを見間違ったまま、本を出してしまった己の不明を羞じるばかりでした。つまるところ衆生が主語に非ず、如来が主語だということなのでした。一切が如来の他力本願の御導きによるものなのです。自力のかけらも無いのです。

半僧半俗のアウトローたる任誓を讃え慕う会衆の数は鰻上りとなり、寺檀制度の上に胡坐をかいていた僧侶たちは怒り心頭、お上に訴えることになります。如来の懐の深さがそのまま映って衆生の大らかさとなれば、どうであれ為政者にとっては、百姓が嬉々として励み耕すに都合良きこと限りなしでしょうが、世の仕組みということになれば、そのような衆生の心の有り様は不穏なるものと背中合わせです。宣布教者である任誓は異安心（異端者）であり、粛清しなければならぬ存在でしかありませんでした。鶴彬は恩師・井上剣花坊とその妻信子の庇護を受け、任誓は本山の常如上人や一如上人、そして蓮如相伝の伝授者でもある堂僧・噫慶の薫陶宜しく、共に己の志を貫きましたが、二人は獄舎に繋がれて落命しました。鶴彬は若干二十九歳の無念の死であり、憤死と云っても良いでしょう。任誓のほうはと云えば、「布教の徘徊罷りならぬ」と再三の勧告を受けたにも関わらず、それを無視して金沢や能美の都へと布教を続けました。村人等と四方山話をする集いからお講が出来上がっていき、次第に同衆が一つになる法延へと拡がっていくうち、参集する人々の余りの多さに寺々の嫉みを買い提訴され、河北能瀬村の弥右衛門屋敷内に幽閉の身となり、ついに享保九年七月二十九日に獄死したのでした。享年六十七歳。その当時としては長命でした。如来の光明の中で従容として死に就いた任誓の生涯は、実に豊かなものだと思われます。二人の違いから何が見えてくるでしょうかね。私は東の任誓・西の鶴彬と称して、近世・近代と時を隔ててはいても彼等を義兄弟だと思っています。

第25回鶴彬川柳大賞成績

【鶴彬大賞】

傷口が開いたままの汚染水
青森県弘前市　高瀬　霜石

【秀句賞】

核のゴミ埋めれば虹も放射性
宮城県石巻市　木立　時雨

平和って何だろ僕等地球の子
宮城県柴田郡　太田　良喜

日本語が聞こえて来ないプロンプター
富山県高岡市　林　進

【佳　作】

八月の遠くて近い鶴彬
大分県大分市　坂本　一光

コロナへはなんと無力な核兵器
山形県山形市　中川　晴海

餅を搗く兎戦車に見え始め
神奈川県平塚市　野村　昌弘

自粛させ弱者の順に餓死させる
宮城県遠田郡　武田　悟

分が悪くなれば出番のシュレッダー
石川県白山市　浜木　文代

【入　選】

ウイルスが怖くて出来ぬ深呼吸
福島県郡山市　坪内　照光

改憲にダブるナチスのあの狂気
宮崎県延岡市　河野　正

戦争を知らぬ世代に核ボタン
茨城県つくば市　庭のしらかば

核の傘から平和説く二枚舌
大阪府八尾市　新海　信二

身の保身尻尾きりしてロングラン
埼玉県上尾市　宮本彩太郎

大空へ核ゼロ叫ぶ八月忌
大阪市藤井寺市　鈴木いさお

うそをまたうそで固めて生き伸びる
東京都大田区　柿沼　昌芳

血で引いた線を血と血で引き直す
埼玉県所沢市　西田　忠俊

黒塗りのページに権力仁王立ち
兵庫県たつの市　井塚ミハル

国民を置き去り独断の総理
石川県金沢市　寺田　香林

切腹を知らぬ美しい国の武士
北海道登別市　小林　碧水

責任を入れたたらいはよく回る
福岡県遠賀郡　米満　けい

改憲は平和を潰す戦争屋
大阪府堺市　堺谷九条男

ウイルスは人種性別差別せぬ
兵庫県芦屋市　北村　紅絵

リーダーに才も覚悟も見えぬ鬱
茨城県日立市　佐藤　規夫

草食の子に老人がぶらさがる
石川県金沢市　越川　智慧

いつの日か干物になっている地球
石川県金沢市　藤井　史朗

自粛せよ辺野古工事も改憲も
茨城県ひたちなか市　樫村　日華

マスクしてなお耐えられぬ腐敗臭
神奈川県横浜市　相原あやめ

積み上げた平和に拉致という小骨
石川県能美市　中川　洋子

家族葬回覧板に浮かぶ顔
愛知県瀬戸市　安藤　なみ

反戦のネジ巻き直す炎天下
大阪府八尾市　穐山　常男

兜太の忌「平和の俳句」読み返す
千葉県千葉市　寺林　繁

政権の指示で隠れる公文書
千葉県千葉市　佐野かんじ

うそぶいた官僚がまた罪のがれ
岐阜県岐阜市　小野小野三

側近の声に消された民の声
富山県魚津市　佐々木たつ緒

まだ五輪したがる人はよく語る
神奈川県横浜市　阿部　浩

父さんの会社が家に越して来た
千葉県松戸市　笹島　一江

匿名のネット命を弄ぶ
東京都中野区　上村　脩

核の保持抑止脅しの使い分け
岡山県岡山市　松田　龍彦

ディスタンス人の温もり裂いてゆく
富山県富山市　おかのみつる

年金が生活保護に嫉妬する
兵庫県三田市　谷口　修平

名を出してネットいじめができますか
富山県富山市　亀田　幸子

揉み手して税に群がる超えた蠅
埼玉県入間市　白柴小太郎

銃口が今日も火をふく病める国
石川県小松市　妻木　義山

雑草が背くらべする休耕田
石川県加賀市　山下いつお

使命感だけじゃ病院耐えられぬ
石川県金沢市　石倉多美子

永らえて初体験の尽きぬ葦
兵庫県加古川市　金井　矩子

沖縄の壕生きた赤子も七五
石川県白山市　穴田　圭子

沖縄に何度も言うが基地いらん
大阪府泉大津市　助川　和美

記録だけ残し歴史に載る総理
東京都板橋区　山田こいし

五月晴れも地上は何故かさつきやみ
東京都府中市　福山　光

三密はコロナが連れてきた新語
石川県羽咋市　辻田みえ子

多数決呑んでトゲ刺す喉仏
石川県加賀市　森山ひとみ

ＧｏＴｏの行く先先の不安顔
石川県金沢市　長谷川すすむ

借金の大穴埋める蟻の列
茨城県つくば市　片野　晃一

ゼロ続き驕らぬ岩手エール沸く
新潟県柏崎市　長井　和子

票田を未だ買いにくる茶封筒
広島県三原市　笹重　耕三

反戦歌謳い自由の世を繋ぐ
大阪府寝屋川市　川本　信子

香港の声が消されてしまった日
京都府長岡京市　西山　竹里

呻くようすすり泣くよう島の風
愛知県瀬戸市　北原おさ虫

拉致家族か細くなっていくエール
石川県能美市　新谷　和隆

人間のエゴ炙り出す新コロナ
石川県金沢市　山本まさる

一国の総理も妻をもて余す
石川県金沢市　山岸　惠子

全力で拉致問題は放ってきた
福岡県北九州市　蛙屋　柳斎

春一番おけ屋のいないアーケード
岡山県加賀郡　有安　義信

戦争ノー祈るお城の八重桜
福島県大沼郡　佐瀬　昌柳

音消して線香花火自粛中
石川県かほく市　竹中つる子

AIに予見させたい事ばかり
石川県白山市　樋爪ふみ子

新コロナ命の格差広がった
奈良県生駒市　こはりつよし

要らぬとき届くマスクのアベ政治
三重県伊勢市　橋本　修

役人が総理の嘘へ合わす嘘
宮崎県西諸県郡　稲毛　寛

武器でしか守れぬという人が増え
石川県河北郡　西田　峰春

香港の自由を縛る力こぶ
千葉県野田市　齊藤　大柳

声高く平和の祈りマスク掛け
福岡県福岡市　酒見　敏子

貧富の差さらに拡げているコロナ
愛知県名古屋市　幅　茂

掲示板匿名で書く正義感
埼玉県所沢市　小田島六郎

消毒液まず政界に届けたい
長野県佐久市　原　志津子

ウイルスが都市化を責める攻めまくる
愛知県春日井市　戸田富士夫

公文書透かしてみたら猿ぐつわ
富山県富山市　小林　正美

まほろばの国に彬の意を生かせ
岡山県岡山市　久本にい地

熱中症コロナ禍マスク忙しい
石川県金沢市　新橋　忠

責任はあるものでなくとるものと
石川県加賀市　赤尾よし樹

給付金子孫に残す重いツケ
石川県白山市　岡田　友二

テレワーク幼児の昼寝待ちながら
石川県白山市　小森　靖江

改ざん死百倍返しでも足りぬ
岐阜県多治見市　宮地　純二

自粛自粛で家族の仲は密になり
石川県かほく市　寺内　徹乗

大阪の空をにらんで彬の碑
大阪府大東市　宮村ふさお

祈ること多き八月また巡る
石川県野々市市　内村　莞爾

保健所病院減らしの付けが今
千葉県白井市　佐々木正康

竹槍で敵機コロナにうがい薬
大阪府交野市　山田　太郎

語り部となってるいっぽんの丸太
大阪府堺市　荻野　浩子

マスク消えコロナが消えて失業者
石川県金沢市　岩原　一角

リーダーの器コロナが検査する
埼玉県朝露市　佐伯　慎一

戦にはノーとはっきり物申す
北海道北広島市　池永　龍生

国会の政治ごっこに高い税
岐阜県岐阜市　金子　鋭一

コロナ禍に勝たねば何も始まらぬ
石川県金沢市　中村　文子

赤字国なのに九割基地負担
福岡県久留米市　馬場ゆうこ

名優に再会巣ごもり映画館
大阪府大阪市　久保田清美

過ちがまだ焦げ付いているレンガ
福岡県北九州市　もりともみち

七十五年風化の進む原爆忌
東京都大田区　右田　俊郎

第二十五回鶴彬川柳大賞　選考総括評

選　者

石川県川柳協会副会長　赤池　加久
岩手県川柳連盟顧問　佐藤　岳俊
東京・川柳成増吟社会長　植竹　団扇
大阪・あかつき川柳会会長　岩佐　ダン吉
かほく市川柳協会幹事　遠田　亀公子

選後感 ―いま思う鶴彬―

石川県川柳協会副会長　赤池　加久

戦後七十五年、あの悲惨な広島と長崎の戦禍が風化しないだろうかと案じられる昨今である。しかし、鶴彬没後八十二年を経た今年、志熱い主催者皆様のお蔭で「鶴彬」川柳大賞が二十五回を数えることができた。これはあの忌わしい時代を再度塾考する貴重な企画であろうと思う。

今回応募された四百五十四句は殊の外レベルの高い作品が多く、何度も幾度も読み返すことを繰り返した。時を同じくして新型コロナウイルスが地球規模で日々の生活を脅かしこの稿を作成時、未だ特効治療薬やワクチンの朗報がないことで句材も多岐に亘った。

そこで、最優秀句以下の上位句について私見を述べてみたい。

まず、最優秀句・・・

「傷口は開いたままの汚染水」

東日本大震災から九年半、メルトダウンした原発からは汚染水が心配され、終息には気の遠くなるような歳月が懸念されている。まさに課題を次代に残す問題である。

次に、秀句・・・・

「平和って何だろ僕等地球っ子」

地球を俯瞰すると、宗教、イデオロギー、果てはエゴとも思える国同士の摩擦等々平和の二字を改めて考えさせる今の現状である。

「日本語が聞こえて来ないプロンプター」

政治家は勿論正確な発言が必須であるが、それにも増して人間性溢れる言葉に惹き付けられる側面がある。昔、大平正芳首相は「アーウー」で鳴らしたが、含蓄のある心に響く内容だった。側近の作文に左右されない発信力のある為政者を切に期待する。

今挙げた作品のほか、まだまだ佳句多数がしのぎを削る。今回も意義ある大賞であったことを付記して選後感としたい。

選者吟　**職去って闇が尾を引く功と罪**　加久

選後感 ―「鶴彬川柳大賞」と現代―

岩手県川柳連盟顧問　佐藤　岳俊

２０２０年８月29日新聞は「安倍首相辞意」の大みだしで出たが、その割には国民には大きな動きが無かった。安倍政権７年８ケ月の歴史を見れば分かるというものである。周知のように安倍政権は「戦争法、改憲」「国政の私物化」を増大させて来たのである。「安保法」「秘密法」「共謀罪法」など、国民の首を絞める法を次々と成立させた。又沖縄の米軍基地が辺野古で推し進められ、世界でただ一国の被爆国日本から「核兵器禁止条約」を拒否する等、核の傘という全く有もしない傘を主張してきたのである。

さて「鶴彬川柳大賞」とは何であろう。

盛岡市に住んでいた鶴彬の兄、喜多孝雄は、鶴彬の遺骨を盛岡の光照寺墓地に埋葬したが、この時喜多孝雄は石川県の喜多家の墓を全て盛岡に移しているのだ。なぜだろう。

「非国民」とされた石川の地では鶴彬が安らかに眠れぬことを知っていたからである。

今、地元から「鶴彬川柳大賞」なる川柳を募集するということは、鶴彬、喜多家、又時代を深く理解するということが重要である。それは現代を深く考察していく精神から発せられよう。安倍政権の改憲や戦争できる国にする姿勢が今急に行き止まりになったが、油断することはできない。

４句について短評したい。

佳作３**「改憲にダブるナチスのあの狂気」**

ナチスのヒットラーと似ている狂気が良い。

佳作２**「国民を置き去り独断の総理」**

前に掲げた悪法の数々を作った総理である。

佳作１**「改憲は平和を潰す戦争屋」**

憲法前文の第９条を破壊する者戦争屋である。

大賞１**「八月の遠くて近い鶴彬」**

８月15日太平洋戦争３００万人以上の国民が死亡した、その戦争の終戦日だった。終戦から75年、平和憲法をつくった人々の中に鶴彬が生きていることを知らなければならない。

選者吟　**安倍政治崩壊コロナまだ続く**　岳俊

選後感 ―「鶴彬川柳大賞」読後感―

川柳成増吟社会長　植竹　団扇

「川柳マガジン創刊20周記念感謝祭」と銘打った懸賞川柳をご存知でしょうか。

天賞の賞金10万円も話題になって、毎月５０００句ほどの応募があります。30名の選者による共選で、賞の決定は徹底的な点数制を採用しています。選考者ごとに、天１００、地80、人60、秀句30句は49から１まで、細かに点差をつけます。

水無月賞を例に取ると、天２６１、地２４０、人２２６、から佳作30の１１１まで、きれいに序列化されています。選者は句評を求められませんが、選考結果は公表されますから、作者には伝わります。

編集者は選考にはタッチせず、合計点を競い賞金を競う、とても分かり易い「お祭りらしい好企画」だと思います。

そんな企画の選者を担当している最中に、「鶴彬川柳大賞」の選者の依頼を受けました。光栄で遣り甲斐のある仕事ですので、喜んでお受けしたのは言うまでもありません。競うことに違いはありませんが、「競う意味合い」が違います。とはいえ、点数化に差異が付き難そうなシステムには多少疑問が残ります。

以下、団扇が選ばせて頂いた、上位５句の選評を述べて、任を果たしたいと思います。

〈日本語が聞こえて来ないプロンプター〉

辞任会見で某記者が質問しました。「今日はプロンプターの用意はなかったのですか？」皮肉タップリの質問の意味を理解できないアベ首相でした。

〈切腹を知らぬ美しい国の武士〉

責任は感じるが、決して自分で取らない首相です。

〈責任を入れたたらいはよく回る〉

足で盥をまわす曲芸ならば、見物の価値がありますが。

〈核のゴミ埋めれば虹も放射性〉

「坊やご覧、虹だよ」「父ちゃん、なんか変な虹だね」

〈父さんの会社が家に越して来た〉

色々と理屈を言わずに、子に語らせて奥行きのある作品です。

選者吟

七つのマスクなおみの夢は二つある　団扇

選後感 ―「鶴彬川柳大賞」―続後感―

あかつき川柳会会長　岩佐ダン吉

川柳で世論に参加を

「皆さ～ん、元気でやってますか」

コロナ禍のために大阪も大半が通信参加の「誌上句会」になりました。私も入院はありましたが半年余も他柳社の仲間とは会えず浮かぬ日を送っています。

安倍内閣の改憲への執念、モリ・カケ・サクラ、兵器の爆買い、買収選挙の資金…川柳ネタはごろごろの中での「大賞」の取組はタイムリーでした。とりわけ「現代を鋭く風刺した、新しい感覚の川柳」の呼びかけ―どんな作品に会えるか楽しみでした。

主張が明確で作者の思いが具現化されたもの、秀句は「平和ってなんだろ僕等地球の子」貧困、そして戦争に駆り出され砲撃が飛び交う中で…何より「僕等地球の子」が胸を打ちました。

佳作3句は

「自粛させ弱者の順に餓死させる」

「コロナへはなんと無力な核兵器」

「核の傘から平和説く二枚舌」

―コロナ禍の弱肉強食、核兵器とは、わが国のあり方について痛切な反省を迫るものでした。

本稿を執筆中に「持病の再発」を理由に安倍総理が辞任表明、最後まで責任とらず辞めはった―

長期化が予想されるコロナ禍の中で「誌上句会」は川柳を詠む、発表する場として貴重です。

鶴彬は17歳で大阪に出稼ぎに、21歳には軍隊内での反軍行動で大阪城衛戍監獄に、獄中にあって猶、不屈の川柳を詠みました。鶴彬は大阪と縁の深い反戦川柳人です。

今年で13回目を迎える大阪城公園での鶴彬を顕彰する「碑前祭」は9月14日の命日に行われます。

私たちは今回の大賞を期にさらに17音字で〝戦あかん、平和と民主主義、暮らしを守る世論〟に参加したいと思います。

選者吟　**彬の火継ごう一日一歩でも**　ダン吉

選後感 ―鶴彬川柳に導かれて―

かほく市川柳会幹事　遠田亀公子

コロナ感染拡大まっただ中での「鶴彬川柳大賞」の募集、さて作品は集まるだろうかと心配したが取り越し苦労だった。「鶴彬川柳」の眼と心を持つ227名の方々の応募があり安堵した。いずれの句も秀れた句ばかりで選句に時間がかかったことは言うまでもない。

「鶴彬川柳」の神髄は、その思想性 芸術性 政治性 世界性 普遍性であろう。時の権力から彼が命を奪われることになった最後の6句の中に、私はそれを見る。

現代のように情報が溢れ表現の自由が保障された時代とまったく違う物の言えない時代。

彼の吐いた6句には一つも反戦反権力の文字はない。それは極限に近い制約の中での表現力が読者に対して深い想像を掻き立てて感動を呼び起こす引き金になっていると思われるからだ。

「政治が悪い」「社会が悪い」「あいつは嫌いだ」「こいつは嫌いだ」と言う安易な言い方では決して心が伝わらないのが身に沁みてわかる。

いい句は心に残り一過性ではない。いつも自分のそばに寄り添い問いかけてくるものである。

「あなたの句はそれでいいのですか？」と「鶴彬川柳」に導かれ、今の時代を鋭く浮き彫りにした句の創出は、新しい時代に生きる者の使命である。

今回の「大賞」作品には充分その熱気が感じられた。次回にも心から期待したいものである。

選者吟　**三密を守り孤独死する老後**　亀公子

宇部 功 氏講演

未来の人たちへのメッセージ

二〇一九年6月27日、かほく市高松浄専寺にて宇部功先生による講演がありました。その翌日、高松・大海各小学校で5年目となる鶴彬の特別授業もありました。

【宇部功氏のプロフィール】昭和18年岩手県盛岡市生まれ。昭和50年、ラジオ川柳に子どもたちと一緒に投句を開始したのが川柳との出逢い。平成10年より久慈市立山形小、八幡平市立寺田小などの校長を歴任。定年退職後はいわて子ども川柳を育てる会会長、NHK文化センター盛岡・川柳講師などを務める。平成27年より高松小学校でも鶴彬の特別授業を行う。著書に「こどもの心 五七五」

こんばんは。たくさん集まって下さり、ありがとうございます。たくさん話したいことはあるのですが、昨年（二〇一九年）の5月19日の寺内（徹乗）さんと東京で或るシンポジウム（「崖っぷちの時代と川柳」）に呼ばれまして、川柳は崖っぷちではないかということで、大学の先生はじめ4人（パネリスト＝左から高鶴礼子氏、宇部功氏、寺内徹乗氏、棚沢健氏）で討論してきました。今日は鶴彬と川柳の未来について私なりに、「現在進行形」のものもありますし、これからどうしていけばいいかという部分も踏まえてお話させていただきたいと思います。

眠らないためになるべく45分で終わりたいと思います。小学校の授業は45分なんです。それは眠らないためなんです（会場笑）。小学1年生は15分で眠くなります。4年生ぐらいで30分前後、5、6年生でも45分すぎると眠くなってしまいます。これが私の何十年間の経験です。1年生の授業では最初の15分でいかに集中させるかということを考えて教室に入ります。

「手と足の・・」鶴彬句碑が転換点になる

「手と足をもいで丸太にしてかへし」の句碑が盛岡に昭和57年に立ちました。ちょうど私が勤めていた松園小学校の校区内でした。それが、私と鶴彬の出会いです。だから、句碑がいかに重要かということです。もし句碑がなければ、私は鶴彬に出会わなかったでしょうし、川柳を自分なりに理解し、子どもたちに返していくということもしなかったと思います。100％しなかったと思います。

それまでの私の川柳人生は、昭和50年から子どもと一緒に全く分からないところからスタートし、鶴彬の句に出会うまでの7年間は、俳句と川柳のごちゃまぜの状態でした。

鶴彬句碑（盛岡市）

私は、ラジオ川柳というところから、子どもたちと一緒にやり始めたのですが、昭和57年に**「手と足をもいで丸太にしてかへし」**という句に出会い、一瞬にして、今まで私がやっていたのは川柳ではないということが分かりました。なぜかというと、この**「手と足をもいで丸太にしてかへし」**の句には人間が出ていた。しかも、人間そのものがドラマチックに描かれていた。この句は普通の人には真似できません。プロとかそういうのではなく、人間愛に満ちた人間でないと作れないと感じました。

なぜ、そう言えるか。最初、この一句を子どもたちにぶつけて授業したのですが、45分では終わらない。それだけでも、この句は大変な句であるということが分かって、そこからどういうふうな授業がいいのかなと考えながら、いろんな形でいろんな学校で授業をやってきました。おおむね子どもたちは「戦争反対の句」であるとか、「戦争って凄いんだね」という答えを作文に書いてきます。この高松小学校でも過去5年間来ていますが、岩手の子どもたちと同じように書きます。それだけでも凄い句だということが分かると思います。だからどこの学校で授業したときも、400字でうまい作文が出てきます。

あるとき岩手大学で先生方60人の前でお話したときに、子どもの作文のコピーを見せました。「中学生か高校生が書いた作文ですか」という質問が来ました。「小学校6年生が書いたものですよ」というと驚いていましたが、鶴彬の作品の高さ、そして、そこから出てくる人間性、こういう作品をとおして授業をやれば、小学校6年生でもこれだけの文章が書けるんだということを分かってもらえました。

私としては鶴彬の多くの作品をどこかで

やってみたいなとずっと思っていました。たまたま高松にきて、ここ5年間、多くの作品、といっても6句なのですが、多くの句に触れるようにしています。やはりどの作品も一つ一つ取り上げて45分でやりたい気持ちです。それだけ、全部値打ちのある作品です。

私は高松におうかがいして多くの方にお世話になっています。特に城戸（寿子）さんは、鶴彬の句の入ったティッシュケースを盛岡まで送ってくれます。私はいろんな学校に行きますが、授業の最後に「これは鶴彬の姪の方が手で一つ一つ作ったんだよ」と言って子どもたちに渡します。子どもたちはそれを使うというよりは、宝物にして持っていると思います。これは凄いことだと思います。鶴彬が今も生きているという気持ちになって、受け取ってくれます。

それから、角島（広治）さん（＝かどしまひろじ、石川県かほく市・鶴彬を顕彰する会副会長）がこの冊子（＝宇部先生の鶴彬の特別授業の文字起こしと子どもの感想文をまとめたもの）を作ってくれました。これは、ありがたいなと思っています。ある方にこれを捧げたら、「これ、本にして売って下さいよ」と言われました。ここには、岩手と高松の子どもたちの生の声が入っています。鶴彬の見方や鶴彬の考えがびっしり詰まっています。だから、私は今年（二〇一九年）、角島さんが亡くなったと聞いた時は、言葉が出てきませんでした。角島さんがこれを作って私のところに持ってきたときはまだまだ元気なときだったので、これについて語りたいことはたくさんあったんです。寺内さんもこの冊子を作るのにご尽力して下さりましたが、鶴彬を多くの人に伝えていく大きな資料になっています。

平野（道雄）さんは、こちら（浄専寺）の住職さん（当時）というのはもちろんなんですけれども、私が最初に高松に来たのはかなり前なんですが、その時は小学校で授業しないで、ここで1回話をして帰りました。岩手県で大人の川柳教室を4つも持っていますので、次の日にその教室に行きました。そうしたら「先生、昨日、石川県に行って鶴彬の話したでしょ」と言われまして、「なんで知っているの？新聞なんかで出ているの？」と聞き返しましたら、「今朝、インターネットで見ましたよ」と答えたので驚きました。そういう時代なんだと。これは6、7年前の話ですが、川柳を愛する方々は、そういうのを把握しているので、凄いと思います。

鶴彬は多くの方々に伝わってきていると思いますが、ここから「未来形」の話をしようと思います。

鶴彬特別授業（2019年 大海小学校）

ティッシュケースを配る城戸寿子さん（2019年 高松小学校）

鶴彬の影響を受けた川村涅槃

盛岡の川柳人も語らないし、私自身も知らなかったし、勉強不足と言われればそれまでなのですが、「川柳マガジン」という大阪の出版社から出ている雑誌があり、私も購読していますが、その4月号に岩手県出身の川村涅槃（かわむらねはん 昭和17年―？）という、宮沢賢治の故郷の花巻川柳会の会長を務めた方が載っていました。残念ながら亡くなった方ですが、「田」という句集を出しているのです。その句集がそのまま百句、「川柳マガジン」に載ったのです。その百句どれをとっても、とんでもなくいい句なのです。岩手芸術祭で最優秀句がとれそうな作品ばかりです。

だまされているからまとまっている棚田

岩手県には棚田があります。田んぼ中心の農民の句が、びっしりです。

午後からのみぞれについてきた訃報

豪邸のうらで切り売りされてる田

どこかで田んぼが安く叩き売りれているということを言いたいのでしょうね。

飽食の子等かんたんに死を選び

厳しいですね。今の時代。自殺する少年や、虐待で亡くなる小さい子どももいます。「ちゃんとやれよ」という句なのかもしれません。

田はいつも精一杯で報われず

これが農民の声です。本当の声です。涅槃さんはトラクターに乗って働いていて、トラクターが倒れ、下敷きになって亡くなったそうです。この方は出稼ぎもやっていまして、忙しい田植えや稲刈りの時は岩手に帰ってやるわけですが、冬は都会で働き、有名な川柳家と出会ったり、いろんな句会に出て川柳を学んできた凄い方です。

どれも凄い句ばかりで、農民の句が、だーっと並んでいます。この句集の前書きを書いた人が佐藤岳俊さん（＝さとうがくしゅん、岩手県・「川柳人」主宰）ということで、4月に岳俊さんにお会いしたので涅槃さんについて聞いてみました。すると岳俊さんは、「あの人は句会に来るときも飲み会に来るときも、長靴を欠かしたことはない人だ。必ず泥の付いた長靴だ」と言っていました。それだけ、農民の魂が込められた人だった。だから、そういう句が出てくるんですね。

それよりも、涅槃さんの経歴をみてびっくりしたことがあったんです。涅槃さんが川柳を知ったのはいつかということをこの句集の前に書いてあるんです。いつだと思いますか？

中学二年生のときに涅槃さんは川柳に出会った。しかも川柳を教えてくれた先生は、美術の先生だった。しかも、その先生は鶴彬の名前を出して川柳を教えた。これ読んだとき、私は電気が走りました。「へえ、やっぱりな」と。その美術の先生は、涅槃さんが中学二年生に鶴彬の名前を出して、川柳はこういうものだよと教えてくれた。これが涅槃さんが川柳の出会いだったと、句集の前書きに書いてある。中学校時代に鶴彬の川柳に出会って、それを自分のどこかにちゃんと持っていたという凄さが、これらの句に全部出ています。明らかに鶴彬精神があちこちに出ています。私は、その美術の先生も凄いなと思いました。

私は、岩手県の川柳連盟の大会か何かで、一回か二回かは涅槃さんにお会いしていると思いますが、面識は全くなかったので、今読んでみて、鶴彬作品に触れて川柳の道に入ったということは、凄いことだったんだなとあらためて感じました。これが川村涅槃川柳の神髄だと思いました。もちろん、都会に出て積み上げたものもたくさんあると思いますが、最後は自分の田んぼを中心にして、そこから奥さんのこととか、周りの地域のこととか、全部川柳に出していますので、凄いです。

たった一回の授業　6年前の小学生との再会

もう一つ、これも未来ので、これもびっくりすることなのですが、5月のシンポジウムで寺内さんにお会いして、盛岡に戻ってきてすぐのことなのですが、岩手県のある進学校の2年生の女子高校生から私の家に飛び込みの電話が来ました。6年前に、全校で二十数人しかいない僻地の小屋瀬小学校という学校で授業したときの子どもでした。彼女は「6年前の授業は今でも覚えています。できたら、私の学校の文芸部の部員と私の学校の仲間で、もう一回やってくれませんか」という突然の電話でした。私は「あなたの名前は何といいましたか」と聞きましたら、「チバアオイです」と言います。「鶴彬の授業でやったのは分かりましたが・・・」と言いましたら、彼女は「そうです、その鶴彬さんの授業をして下さい。それと川柳の江戸時代からの歴史を話してください。もう一つは、川柳の作り方をやってほしい。それを60分でやってほしい」と言いました。私は行くと約束しました。

私がびっくりしたことは、たった45分の1回の授業を、よく6年間も覚えていたなということです。その子は当時の校長先生に電話して、その校長先生から私のところに電話が来て、「電話番号を教えていいか」と聞かれたので、「いいよ」と答えたらすぐ彼女から電話が来ました。このことは、私からすれば奇跡的なことです。この子は城戸さんのティッシュケースを使わないで大事に持っていたのではないかと思います。

鶴彬の作品の凄さは、涅槃さんの作品にもたくさん表れていることなんですが、生き方が地味なんだけども、しっかりとじわじわと出る作品なんです。私は最初のころは**「手と足をもいだ丸太にしてかへし」**の一句しか授業でやりませんでしたが、教職も終わりのころ鶴彬が出した最後の六句を全部やるようになりました。その中の**「胎内の動き知るころ骨がつき」**をやったら、六年生の女の子たちが泣き始めたんですよ。作文を書いてほしいとは言えなくなって、紙だけ置いてきましたら、女の子たちは全部**「胎内の動き知るころ骨がつき」**についての感想を書いてくれました。

彼女はそうした僻地の学校から進学校に行き、そこの文芸部の部長になり、何年も経ち、鶴彬のことをふと思い出し、鶴彬をみんなに伝えたくて、「来てください」と言いました。凄いなと思いますし、ありがたいと思います。文芸部の顧問の先生に電話したら「是非、来てほしい」ということでしたし、

「もしかしたら、先生方も行くかもしれませんよ」と言われましたので、「何人でもいいですよ」と話をしておきました。７月４日の予定です。

岩手の小学生から凄い川柳が続々

これも未来の話になりますが、８月４日に子ども川柳の研修会があります。私が学校を退職して公民館に勤めたのが平成15年。毎年２回やっていますので、だいたい30回になります。これまで、ある程度限られた先生方を育ててきたのですが、だいたい岩手県内の20校くらいから１５００句から２０００句ぐらいきて、私は１５０句前後しか選んでいません。なぜかというと、10倍ぐらいの確率でないと全国との勝負はできません。これは全国に発送していますので、ほかの県の作品も一緒に載るわけですと。すると、岩手県の作品は段違いにうまい。うまいはずです。10倍の競争率を抜けてきたわけですから。

今回、なんとかしようと、３年ぐらい前から盛岡近辺の優秀な子どもたちを15人ほど集めて猛特訓しています。絶対に川柳作家にするという意気込みでやっています。

だいぶん前にもお話ししましたが、岩手県には小学校５年生で小説を出した三船恭太郎という子がいます。今は東京の大学の三年生ですが、彼は小学校３年生で俳句や短歌を始め、４年生で川柳も始め、中学校１年生で読売新聞の全国作文コンクールで「復興の光」で最優秀賞です。４００字詰めの原稿用紙30枚で大人でもかけない文章です。高校に行っても短歌の部で優秀賞をとっていました。私とは川柳で４年生のとき出会い、私は川柳マガジンに彼の川柳を２年間24回投句し、全部入選していました。24回全部入るというのはとてつもないことです。それを当たり前にやれる子どもでした。あるとき、私は彼に、「どうやったら小説書けるの？」と聞いたことがあるんです。彼は「簡単ですよ。先生も明日から小説書けますよ」と言うんです。「どうやるの？」と聞いたら、「川柳を十句書くんです。それをつなげていったら、エッセイになります。それに登場人物を出し、膨らませていけば、小説になります」と言いました。そういう発想は優れたものです。

あるとき彼を盛岡市内のお寺や神社などの町巡りに連れていったんですよ。彼は、何カ所か周っている間に、メモ帳に７句ぐらい川柳を書いているんです。書きなさいといったわけではないんです。凄いなあと思いました。小学校５年生ぐらいだったと思います。そういう子どもたちが、岩手県にはたくさんいます。どこの学校にもいます。さっき言った20人くらいの小規模の小学校にもいます。その学校が何人かではなく、その学校の意気込みだと思います。

まだ驚くことがありました。全日本の大きな川柳大会が６月18日に静岡県の浜松市でありました。それに岩手県内の句を何句か出しましたが、８０００句の中の上位９句の中に、岩手県の句が２句入ったんですよ。今までなら、２年に１回、１句が入るか入らないかでした。入選の１５０句に入るだけでもすごいことです。第一選者と第二選者がいますので、９句に入ること自体凄いことです。７月号の川柳マガジンに学校名が載ると思いますので、それが楽しみです。紹介します。

「尾」が題で集めた句だったと思います。

今のぼくバランスとれる尾がほしい
（小学校６年生）

また来てね　じじの車をおいかける
（小学校２年生）

その入選した子の一人は、今は３年生になっていますが、普段から川柳がうまい子どもでした。岩手県内の川柳で毎月優秀句を十数句選び、年間１５０句になりますが、その中から24句を年間賞として選んでいますが、その子はその中にも入っていました。この子のいる城北小学校は８００人もいる学校なのですが、全員でやっているんです。私のところに川柳がこれほど分厚いのが来ます。担当の先生が郵送しないで、直接私のところに持ってきてくれます。１時間かけて選び、もっと選びたいのですが、他の学校とのバランスも考え、40～50句選びます。没になった句の中にも、いい句がたくさんあります。

その小学校の児童の一人で、かつての三船恭太郎君のように素質もやる気もある子どもがいました。彼は宮城県の気仙沼に転校しましたので、私は川柳を続けてほしいと思いましたので、先生にお願いし、なんとか連絡をとってもらいましたら、その子からファックスで作品が送られてきました。どれをとっても申し分のない作品でした。いずれそういう子どもたちが将来の川柳を作っていくのではないかと思います。

どの子にも持っている凄い素質

どこの学校にも、絶対にいます。いないのではなく、発掘しないだけの話で、大人の責

任でもあると思います。これは川柳だけの話ではなく、どこの学校にも何かに優れた子どもたちがたくさんいます。岩手県の出身では、今、大谷翔平が毎日ニュースになっていますし、菊池雄星もニュースになっていますが、あの子たちも、はじめは当たり前の子どもだったんです。最初から大リーガーの選手ではないのです。どの子も優秀な素質をもっていますし、磨けばどうにでもなる要素はあるのです。それを誰がどんな風にどこでどういう出会いをするかがすごく大事になってきます。その出会いを作るために、私たちは、いろんなことをしていかなければならないというのが私のまとめです。

自分の積み重ねを大事に鶴彬を伝えたい

この前の5月の東京のシンポジウムでも、川柳は歴史が弱いし、歴史性の問題もあるし、今までの作品の評価も曖昧な部分があるという意見も出ました。私もみんなその通りだと思いますが、誰がそれを責任もってやれるかと言われれば、それはなかなかできない。だから川柳をやっている人は、できるだけ自分の積み重ねを大事にして多くの人に伝えていく。できたら、このかほく市のように資料室を作る。というのも地元の人のみならず、全国の人も来る可能性がある。

私も昨日、資料室に立ち寄り、また新しい発見をしてきましたが、鶴彬大賞の年度賞を見ると、時代が出ています。鶴彬の作品は言論の自由がない時代、特高につかまると普通の人生を歩めなくなる時代に、やったら捕まるよと警告されながらも、**「手と足をもいだ丸太にしてかへし」**の句を発表した。そういうことは、しっかり伝えていかなければならないし、こういう重みのあるものはしっかり小中学生の間に、つかませるということがいかに大事か。

感性豊かな若い時代　鶴彬との出会い大切

川村涅槃さんのこと。私がかつて僻地の小学校でやった鶴彬の授業を覚えていた女子高生のこと。こういう例をみると、私が幼少のときに、できれば感性豊かなとき、こういう作品に出会っていれば、私ももう少し早く鶴彬の川柳に出会っていれば、川柳をもっと早く発表できたんだろうなと思います。

私自身も、鶴彬の作品に向かい合ってから何年かして、岩手県の芸術祭の審査員をやったり、私自身も投句して最優秀賞をもらったり、いろいろやってきましたが、鶴彬の作品と出会わなかったらできなかったと思います。出会ったからこそ、そこから勉強しなければだめだと思い知らされたわけです。私は平成10年のときに、山の中の小学校の校長になりました。そのときに、私に一枚の葉書が来ました。「あなたは、鶴彬の授業が出来る人です。どんどんやって下さい。私は岡田一杜さん（おかだいっと＝一九二二―二〇一五、金沢市、鶴彬の研究者、和川柳社主宰）に葉書を出します」と。その時私は、岡田一杜さんは誰なのか分からなかったのです。その三日後に、一杜さんが書いた本が送られてきました。その日のうちに読みましたが、私の考えと違う部分もあったし、知らない部分もかなりありました。

その一杜さんを知っていた吉田六太郎（一九一六―二〇一三）という大先輩の教師は、凄い人だなと思いました。この人は、宮沢賢治研究会の会長をしていましたが、宮沢賢治だけでなくて、鶴彬も知っていたどころか、一杜さんともかなりまえから手紙のやりとりをしたり、句集を送られたりしていたのです。その一杜さんからは、毎月欠かさず私のところにも句集やら励ましの手紙が送られてきました。

驚くことがたくさんあり、話しきれませんが、いずれ語り継ぐ方があって、われわれが何としても生かしていかなければならない。そこが、いま問われている崖っぷちの川柳の事実です。しかし、若い芽は確実に種をまけば、育っていくということも事実です。

種をまけば若い芽は確実に育つ

その証拠を今日、持ってきました。（高粱の穂を出す）。これなんだか分かりますか。鶴彬の川柳**「高粱の実りへ戦車と靴の鋲」**に出てくる高粱です。これを寺内さんから、2、3年前に頂きまして、それを去年思い出しまして、6月ぐらいに私の畑にまいてみたんです。そうしたら、ばっと3メーターぐらい伸びて、収穫したのが11月。私はいろんなところに行くたびにこの高粱を持っていきます。1本は寺内さんにお返しし、もう一本は明日高松小と大海小学校で授業をし、「鶴彬だと思って育てて下さい」と言って子どもたちに分け与えようと思います。現に、この間東京に行ったとき、高粱を持って行き、分けてあげました。そしたらすぐに埼玉県の人から葉書が来て、「種をまきました。4センチぐらいの芽になっています」と書いてありました。寒い盛岡でも、雪の降る直前まで、頑

宇部先生の育てた高粱

張らせました。かなり丈夫です。この高粱をお酒にも主食にもしますが、戦争のためとはいえ、明日、明後日収穫だというときに、戦車でつぶしていく。そのあと、兵隊さんが丁寧に軍靴でつぶしていくというのが戦争です。だから、戦争は絶対にやってはいけない。二度とやってはいけないんです。私はトランプさんに会って、この高粱をあげて、この話をしたいくらいです（会場笑）。この種をアメリカで植えて、それをアメリカの人に伝えて下さいと。とにかく戦争は何が何でも駄目だし、小さい戦争だろうが、その後始末は終わらない。終わらないどころか、お互いに憎しみが重なり合って、そこからは何も生まれない。鶴彬はそれを命がけで伝えようとしたのだと思います。

逆に子どもたちから鶴彬のことを教えられた

私が**「手と足をもいだ丸太にしてかへし」**の授業をしたときに、子どもたちから逆に教わったことは、「鶴彬の作品は、鶴彬そのものだよね」ということでした。最後に子どもたちは私に、「鶴彬のように先生は、ああいう句を作ってやれますか」と逆に言われました。「時代が違うんだよ。言論の自由は、今許されているから、今、鶴彬の授業をしても、明日、学校に来ることができるけれども、あの時代にこの授業をしたら、警察にまっしぐらだ」という話をしたら、「鶴彬はすごい人だったんだね」と子どもたちはうなづきます。そこから、鶴彬の人間性について語り合っていきます。道徳の授業になっていきます。だから、一週間やってもこの授業は終わらないんです。どうなったら終了と言えるのか、私は何回も思いました。いい作品、いい川柳には、作者の生き方が問われてくるし、本物と偽物の差が出てくるんだと思います。

今、サラリーマン川柳やシルバー川柳が出てますが、５年ぐらいなもので、５０年、１００年と生き続ける川柳は、まったく別物です。そこは、今度私と会う高校生にもしっかり言わなければならない。川柳というから、軽い気持ちでサラリーマン川柳的なものを予想して期待してくる高校生や先生方もいると思います。でも、そんな軽いものではないよと最後に言わなければならない。私たちは鶴彬の川柳を多くの人に伝える義務と伝えていく人材を開発していかなければいけないということも頭に入れておきたい。

すごいもの持っている鶴彬顕彰会に
これからの人材の発掘と育成を期待

このかほく市の鶴彬を顕彰する会は、映画を作り鶴彬を全国に発信し、多くの人に鶴彬を伝えてきたすごいものを持っている。人材さえしっかりしていれば、たとえ資料館がなくなろうが、句碑がなくなろうが、人間が伝えられます。でも句碑は、すごい力になっています。そういう意味では、句碑を立てるという意味は大きいです。そこからまた人が育っていきますので。なんだかんだといい、60分になりました。これで終わります。

（文責・寺内徹乗）

宇部先生の講演を振り返って

鶴彬を顕彰する会幹事　寺内　徹乗

繰り返しになりますが、これは昨年、６月27日の講演録です。本来ならば昨年中に発表すべきでしたが、私の自身の問題で仕事と鶴彬の活動との両立が難しくなり、この講演の文字だけではなく、「はばたき」の発送自体も滞りました。宇部先生をはじめ読者のみなさまには、この場を借りてお詫び申し上げたいと思います。

この講演の中で、高粱のお話は印象的でした。６年ほど前、鶴彬の資料室ができた当初、私は高粱の写真を飾りましたが、リアリティーを感じませんでした。私は本物の高粱が見たくなりましたが、中国に行くには言葉の壁もあり、３人の子どもがまだ小さいということもあり、高粱の種を取り寄せて自分で育てることにしました。中国とは気候が違うので失敗するかもしれないと思いながら種をまき、成長段階で虫に食べられ枯れたものもありましたが、ほとんどは私の背を超える高さにまで成長し、種を付けました。あのときの忘れていた感動を、この講演は思い出させてくれました。

川村涅槃さんの話もとても興味深く、さっそく「川柳マガジン」を取り寄せ、拝読しました。６年前の小学生が高校生になり、そのたった１回の授業を覚えていて、宇部先生にコンタクトをとったという話も感動的でし

た。先日、宇部先生からお手紙と新聞記事（「時事知る大切さ説く」）も頂きました。岩手県では、宇部先生のまいた種が確実に芽を出しているようです。

鶴彬を顕彰する会の中心メンバーは、平野喜之さんや私などを除けば、みなさんご高齢です。また、地元で鶴彬を普及されてきた方々は次々と鬼籍に入られました。例えば、和川柳社主宰で昭和24年から鶴彬を研究し、最初の句碑を立てた岡田一杜さん。30年前より、鶴彬忌川柳大会を一杜さんから引き継ぎ、全国公募の鶴彬大賞を始めた高松川柳会の橋爪無声子（宏）さん。長年にわたり鶴彬通信「はばたき」を作ってこられ、高松小学校での鶴彬特別授業の実現に尽力された角島広治さん。この講演の翌日の大海小での特別授業のあと、私は宇部先生、小山広助さん、城戸寿子さんとで、かほく市中沼の了念寺にある角島さんのお墓に参ってきました。同行して下さった角島さんの奥さんはお墓の前で、「すごくまめな人で、毎年、（お墓に敷いてある）この玉石を一つ一つきれいに洗っていました」と語っていました。本当に悲しく、本当に心細いです。

正直なことを言えば、私は、若い世代へ活動の輪が広がらないというもどかしさを感じながら活動を続けてきました。先輩方からは努力が足りないだけだというお叱りの声もあるかも知れませんが、そればかりではないと思います。高松小中学校に関係した教員が、鶴彬や川柳や戦争の歴史について何も教えてこなかったということも理由にあると思います。

戦後の高度成長期に生まれ育った私の世代の多くは、平和の恩恵を当たり前のように享受し、戦争の歴史については無関心です。中には、偏った政治エンターテインメント番組や誤ったネット情報で学び直しをし、史実と異なる歴史を信じ、戦争の反省をやめ、自国を過剰に誇り、隣国の人たちや隣国をルーツに持つ人たちを差別し、誹謗中傷し、日本も戦争できるよう改憲すべきだと主張します。こうした人たちが圧倒的多数を占めたとき、日本はどうなってしまうのか。今、川柳どころか、日本そのものが崖っぷちにあり、私たちはそのことにさえ気づいていないのではないか。そう思うこともあります。

うれしいニュースもあります。先日、高松小学校3年生の私の姪が『高松の偉人について調べよう』という宿題が出たので、鶴彬のことを教えてほしい」と言って、私にインタビューをし、それを上手にまとめていました。同じく高松小学校3年生の私の長女が「総合の授業で〇〇君と鶴彬について調べるから、鶴彬の絵本を借りていくね」と言って学校に持って行きました。この子たちがそれぞれのクラスで発表すれば、高松から平和の輪が広がるのではないかと思います。私たち大人は、こうした小さな芽を伸ばしていかなければならないと思いました。（完）

子どもの心を育てる川柳教室

時事知る大切さ説く

戦争の悲惨さ、命の大切さも

第32回子どもの心を育てる川柳教室（いわて子ども川柳を育てる会主催）は8日、盛岡市愛宕町の市中央公民館で行われた。学校教育の現場に川柳を取り入れている教員や実際に川柳を学んでいる児童ら約10人が参加。同会の宇部功会長が「鶴彬と盛岡」と題して講話したほか、川柳作りのポイントを指導した。

鶴彬は石川県出身の反戦川柳作家。教室では**「手と足をもいだ丸太にしてかへし」「高粱（こうりゃん）の実りへ戦車と靴の鋲」**など6句を紹介した。このうち、「胎内の動き知るころ骨がつき」は、女性が妊娠してもうすぐ子どもが生まれるとき、突然に旦那さんが戦争で亡くなった知らせを聞く内容。

宇部会長は「生と死の二つの場面が書かれていて、以前は学校であまり取り上げたくなかったが、6年生ぐらいだとそのことも知っていた方がいい」と話し、川柳を通して戦争の悲惨さや命の尊さを訴えた。

川柳つくりのポイントの指導では、川柳を作る前段階として、いま世界で何が起き、問題となっているかを知ることの大切さを教えた。

宇部会長は「課題プラスいま、未来を考える。テレビのニュースを見たり、新聞を読んだり、あるいは人の話を聞くことがすごく大事」と説明。時事川柳でも、未来にとって必要な川柳は、自然と残り伝えられていくと説いた。

初めて教室に参加した八幡平市柏台小6年の岩渕七海さん(11)は、今年4月から学校で川柳を学んでいるという。「川柳は少しの字だけでいろいろなことを表現できるのが面白い。いつもは川柳を作るのに時間がかかったり、あまり思いつかなかったりする。きょうは、いろいろな人がたくさんすごい川柳を作っていることを知り、自分もいい川柳が作りたいと思った」と話した。

―盛岡タイムス 令和2年8月11日号―

宇部先生特別授業の感想文Ⅱ

かほく市立高松小学校６年（順不同）

二〇一九年６月28日の午前中に高松小学校、午後に大海小学校で当時６年生に、宇部功先生による鶴彬の特別授業がありました。この授業も昨年で５年目となります。前回号の続きです。

かほく市立高松小学校６年（当時）

●啄木のファンだった鶴彬に驚く

《杉本　祐理》鶴彬さんの名前は少し聞いたことがあったけど、他のことはなにも知らなくて今日の授業を受けて、高松出身だということや戦争の辛さ、川柳のすばらしさについてもくわしく知ることができたのでよかったです。そして、鶴彬さんのほかにも石川啄木さんや田中正造さんなどの人物のことを知ることができて、もっと本やインターネットでも知らべてみたいと思いました。今日、勉強した中で一番おどろいたことは、鶴彬さんが石川啄木さんの大ファンだったということです。まだまだ、石川県の歴史人物について知らないことがたくさんあるので、また授業を受けてみたいと思いました。

●本音言えない時代はいやだ

《須藤　玲菜》私は、あまり鶴彬さんのことは知らなかったけど、この時間を使って鶴彬さんについていっぱい知ることができたし、宇部さんのおかげでくわしく知ることが出来てよかったです。鶴彬さんは、川柳を色々かいていて、すごいと思ったから、ひまな時があったらもっと鶴彬さんについて調べたいと思ったし、鶴彬さんの句碑を見にも行きたいと思った。資料にある鶴彬さんの写真の横にある文の中に「戦争は間違っているとみんなにきづいてもらうため、戦争を詠んだ川柳を川柳人に発表しました」と書いてあって、この時代はすごい大変だったと思ったし、本音がいえないのは、いやだと思いました。少し言葉が難しいところもいっぱいあったけど、色々と分かった。だから、いとこやしんせき、家族にも鶴彬のことについて話したいし、「今日こんなことしたよ！」など家族に言いたいと思いました。

●何事にも屈しない心を学んだ

《曽原　楓雅》鶴彬さんは戦争を反対と言うとつかまると知りながら、みんなのために戦争をやめようという表現をした川柳を書いたところがぼくはすごいと思いました。この授業をして、ぼくは何事にも屈せず、目標を達成するまであきらめないようにしていきたいと思いました。

●身近な有名人に驚いた

《高野　朔》こんな身近な場所に有名なひとがいるとはびっくりした。鶴彬さんがどんなことをしたのか宇部さんから説明を聞いているうちに鶴彬さんについて興味がもてて家ではさらに細かく調べて鶴彬さんがどんなことをしたのか具体的に調べてみたいなと思いました。鶴彬さんの説明をきいているうちに歴史に名を残すような人物でもおかしくないと思いました。

●次の世代に鶴彬を伝えたい

《竹中　彩音》今日の特別授業で鶴彬さんについてたくさん学べました。鶴彬さんは戦争の時の苦しみを表したり川柳に込められた意味が分かりました。また、他の有名な人についても分かりました。自分は「手と足をもいだ丸太にしてかへし」が心に残りました。その時のことについて想像すると、自分も戦争がこわいと思いました。宇部先生が言っていた「戦争は永遠に続く」という言葉の意味を深く考えるにつれて、戦争のおそろしさがより分かりました。鶴彬さんは戦争はいけないという川柳を残していてすごいと思いました。石川県にこんな有名な人がいて自分もびっくりしました。戦争はやはり危険なので、次の世代にそのことについて伝えていきたいと思います。これから鶴彬さんについてよりくわしく知りたいと思いました。

●29歳でなくなりかわいそう

《玉田　遥香》鶴彬さんのことを学んで29歳の若さでなくなったことが今日知ってこんなにわかいのにかわいそうだなと思った。鶴彬さんは川柳を五七五であらわし、いろいろな場所におかれているんだなとわかりまし

た。鶴彬さんのことを宇部先生が教えてくださってありがとうございました。

●戦争に反対してつかまるのは悲しい

《鶴見　昴哉》鶴彬さんのことは、知らなかったけれど宇部先生のおかげで知れたし、戦争のこともよく知れたので将来平和であり戦争をなくしたいと思いました。理由は、「戦争は嫌だ」と言っただけでつかまってしまうというのがとても悲しいことだからです。ありがとうございました。

●高松にこんなすてきな人がいたなんて

《豊田　菜々子》私は高松にこんなにすてきな人がいるとは思わなくて、宇部先生の話を聞いて鶴彬さんのことや鶴彬さんの句をこまかく教えてくれてありがとうございました。私は鶴彬のことは聞いたことがなかったけど、宇部先生の話を聞いてとてもわかったので機会があったらほかの鶴彬のことを調べたいと思いました。

●言葉で伝えられないこと　川柳で伝えた

《延田　遼介》鶴彬さんという名前は聞いたことがあったけど何をした人か知りませんでした。だけど、今日の話を聞いて分かりました。鶴彬さんは、川柳を書き川柳で戦争を表し、平和を望んでいた人。高松の出身で29才というわかさで亡くなった人。中学生から大人の川柳でも入選するくらいすばらしい川柳を書き続けた人。ぼくは高松出身の人でノーベル賞をもらえるくらいの人がいたことは知らなかったけれど、鶴彬さんのように戦争はだめだと言葉では伝えられないことを川柳のように他の形で伝えていて、本当にノーベル賞をもらえるくらいの人だなと思いました。

●戦争しちゃいけない　思い伝わる

《本多　裕大》ぼくは、今日の特別授業を受けるまではつるあきらという名前をきいたこともなかったけど今日の授業をうけてわかりました。「川柳人」の高松歴史公園にある石ももう一度見て見たくなったしつるあきらさんの口には出せなかった「戦争なんてしちゃいけない」という思いをおしえてくださりありがとうございました。

●深い意味のある川柳だ

《麦元　翔》ぼくは、鶴彬さんのことは聞いたことがなくて全く知らなかった。宇部先生の話を聞いて、戦争はやっぱりしない方がよい。鶴彬さんは、戦争はだめだと知っていて心の中で思っていてでもこの時代で言ってしまうと言論の自由ということでつかまってしまうのでふつうの人は言えなかった。でも鶴彬さんはみんなに気づいてもらうために自分のことよりもみんなのことを考えて行動したのですごいなと思いました。一つ一つの川柳にはちゃんと深い意味があってそれは一時間あっても話せない深い話なんだなと思った。これからはお母さんやお父さんやインターネットでどんどん鶴彬さんのことを知っていきたいなと思いました。

●鶴彬の川柳に勇気感じる

《宮本　峻太郎》鶴彬さんの話をきいてみて、「鶴彬さんってとてもいい人なんだな。」というのを感じました。最初は、だれこの人と思っていたけど話を聞いているととても勇気があるんだなと分かりました。なぜなら、鶴彬さんは戦争では負けていたけど映画では戦争で勝っている所だけをのせているということを川柳で表したことが勇気があるなと思いました。

●鶴彬は全国にほこれる人だ

《森　次郎》ぼくは宇部先生の話を聞いて、鶴彬さんはすごいことをしたんだなと思いました。それに、石川県かほく市に全国でみんながすごいと思えるような人がいたとは思わなかったし、次は鶴彬さんのことをいっぱい勉強して鶴彬さんのことを知れるようにしたいです。また、鶴彬さんは何個も川柳を作っていて戦争はしてはいけないということをあらためて知れて良かったです。また、最後にもらったティッシュ入れはとてもたいせつな物です。鶴彬さんのことをいろいろ教えてくれてありがとうございました。

●鶴彬の息が詰まる思いに共感した

《南　恵梨香》鶴彬さんのことは多少知っていたけど人生の最初から最後までを知っていたわけではないので、いい勉強になりました。鶴彬さんは苦労をして生きる人生を歩んでいて、でも心強く大樹のように生きていた

と思います。そのころの日本は戦争に対する不満をいっただけでつかまって、でも昭和三年に何もしていないとは思うけどプロレタリア研究会のメンバー三人が検挙される事件が起きて鶴彬さんはとてもショックを受けたと思います。病にかかっても、かんし付きで入院していて息がつまるような思いをしたと思います。でも、そんな中で詩や川柳などを作っていた鶴彬さんを私はそんけいします。

●命をかけた鶴彬の思い伝わった

《山本　羽音》鶴彬さんは、自分の身がどうなってもいいから、戦争は絶対にいけないという川柳を残していったのはすごいなと思った。今になっても語り続けられてたくさんの人に知られるほどすごい人が高松出身とは高松のほこりだと思う。今日の話はとても大事で忘れてはいけないことだと思った。「戦争はいけない」というだけでつかまってしまう。昔は、私は絶対に生きていけないと思った。そんな世の中なのに国の決まりに背いてどれだけ戦争がダメなものなのかを命をかけて伝える鶴彬さんは、宇部先生が言ったように全国の教科書にのせてもいい人物だと私も思った。「戦争はいけない」と伝える川柳を世の中に出す前に、先生に「つかまるよ」といわれていたのに、それにかまわず出したのは本当に戦争を止めたかった思いが分かった。

●努力すれば必ず思い伝わる

《安江　由希奈》私は、高松にこんなすごい人がいたなんて初めて知りました。「鶴彬」という名前は聞いたことがあって川柳が上手だった人ということは家族からも教えてもらったことはあります。でも、今日宇部先生から鶴彬は戦争をやっている中で戦争に反対する川柳をかいて29才で亡くなったということを教えてもらって鶴彬のすごさがあらためて分かったし、とても努力していた人なんだなと思いました。私は鶴彬の戦争を反対する強い気持ちがあって努力を続ければ必ず自分の思いは伝わるのだと思いました。いつでもあきらめない心があれば何でもかなえられるということを鶴彬さんに学びました。

●家族にも学んだことを伝えたい

《山本　慎一郎》ぼくは、高松にこんなすごい人がいるとは思わなかったし、鶴彬さんのことが少しでも分かったから家に帰ったら家族に高松にはこんなすごい人がいるんだぞと家族にいいたいです。宇部先生が、鶴彬さんの川柳のいみをとてもくわしくいっていて家族に話すときにも自分が分かったことをいかして説明をしたいです。今日は特別授業をしていただき本当にありがとうございました。

●もっと知りたくなった鶴彬

《岡田　優》鶴彬さんは「戦争なんかしちゃいけない」と決意し、戦争を詠んだ「川柳人」に発表した。しかし、鶴彬さんは29才でなくなりました。私は、一番心に残っているのは、田中正造のことを知れたことです。また、鶴彬さんのことをもっと知りたいと思った。

●私も言うかも　戦争反対と

《沖野　菜月》今日初めて鶴彬さんという人を知ってこんなすごい人が高松に住んでいたなんてびっくりした。鶴彬さんがいた時代には「戦争なんかしちゃいけない」と口に出していったら逮捕されるといっていた。鶴彬さんの時代は厳しいなーと思いました。私はこの時代にいたら、戦争はだめだというかもしれない。

●鶴彬は日本の英雄だ

《上野　愛勇徠》ぼくはあまり鶴彬さんのことをよくしらなかったので、先生の話を聞いてよくわかりました。ぼくが思うには鶴彬さんは日本のえいゆうだと思います。鶴彬の川柳をよんで、僕が一番心にのこっているのは手と足をもいだ丸太にしてかへしの川柳です。ぼくも鶴彬さんのようなすごい人になりたいと思いました。

●鶴彬は高松の誇りだ

《喜多　英佑》宇部さんがいっていたように、鶴彬は戦争に対してのいかりが強いことがすごく分かった。自分、家族、友人までをぎせいにし川柳を通し人々に戦争はよくない。戦争はやっちゃいけないと、戦争に反対すれば逮捕される時代でも呼びかけたからだ。「万歳と上げていった手を大陸において来た」など、たくさんの戦争に対するいかりを川柳に書いた鶴彬は高松のほこりだと思った。

●私も川柳にチャレンジしたい

《小林　未来》私は、鶴彬さんという人がどんな人か知りませんでした。話を聞いて、川柳を書いた人ということが分かりました。そして高松には、このようなすごい人がいるのだと分かりました。鶴彬さんのみょう字は「喜多」というと分かって少しびっくりしました。今日のことをお母さんなどに話したり、鶴彬ということをもっとくわしく調べてみたいなと思いました。私も川柳を書いてみたいと思いました。

●昔のこともっと詳しく知りたくなった

《小山　翔暉》ぼくは、宇部先生から鶴彬さんの話をきいて、まったくしらなかったことが少しはわかった。例えば、手と足をむりやりちぎったりするのがいやでいたかったということがわかったから、このような特別授業や昔の人たちのことをしっかり聞いたりしてもっとくわしくなりたいです。

●鶴彬のこと　興味もった

《白江　春瑠》今日、宇部先生から鶴彬さんの話を聞く前は何も知らなかったけど、宇部先生から話を聞いて鶴彬さんはたくさんの川柳を作った人だと分かりました。それに高松にこんなにすごい人がいることも知りませんでした。今日、鶴彬さんについて話を聞いて興味をもったのでたくさん調べてみたいと思いました。

●鶴彬の川柳　かわいそうなものばかり

《高田　陽輝》戦争をしているときに戦争を反対したり、英語を言うだけでつかまるのはおかしいと思いました。でもそんななか川柳を思いつく鶴彬さんはすごいです。鶴彬さんの考える川柳はとてもかわいそうなものばかりでした。

●昔の戦争のこと　学べてよかった

《竹中　蓮》今日鶴彬さんの授業をうけて、石川県にはこんなにすごい人がいると分かったし、いろいろな川柳があってすごかった。石川県だけでなく岩手県にもすごい人がいると分かった。彬さんは29才でなくなっていてすごく若い時なのでかわいそうだと思った。昔は戦争があって多くの人がなくなっている。こんなことが知れてとても勉強になった。また、鶴彬さんのことについて調べてみたいなと思いました。

●手と足の句　かわいそうだと思う

《豊田　萌々子》鶴彬さんの名前は本名じゃなくて本当は喜多一二という名前だと分かった。戦争の時代に「戦争ってだめだよね」などといったり英語を使ったりしたらたいほされる時代は大変だったんだなと思った。鶴彬さんの「手と足をもいだ丸太にしてかへし」のもいだが手足をむりやりにとるということも分かったし、手足をむりやりとるのは痛そうなのでその時に手や足をむりやりとられた人はかわいそうだなと思った。

かほく市立大海小学校6年（当時）

●手と足の句　奪われた人の苦しみ伝わった

《笠置　煌和》ぼくは鶴彬さんの名前は知っていたけど、何をしていたかはわかりませんでした。話を聞いて戦争は二度と繰り返したらダメだということを今よりもっと感じてきました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」の話を聞いて意味がわかったときに思ったことは、戦争でいろんな部分がうばわれた人の苦しみなどが心に感じてきました。戦争を反対するような言論をしたらたいほされる時代だけど、鶴彬さんは自分をぎせいにしてでも日本のそのころの現状を伝えたというところに感動しました。自分だったらできません。戦争はいろんな人が苦しんだり、悲しんだりするしいろいろなものがうばわれるのでもう二度とそんなことはくり返してはだめだと思います。これからの世界は平和になってほしいです。

●手と足の句　痛さつらさが伝わった

《櫻井　悠華》私は、鶴彬という人を初めて知りました。鶴彬さんは戦争はまちがっているとみんなに気づいてもらうため、戦争をよんだ川柳を書きました。戦争があった時代では、「戦争なんかしちゃいけない」と口に出していうとたいほされるのにすごい勇気があるなぁと思いました。私が一番心に残った川柳は「手と足をもいだ丸太にしてかへし」で、この川柳を詠んだときは、戦争があった

時代はますいがないから、体をおさえつけられてむりやりとられていたのでとても痛くてつらかっただろうなと思いました。自分だったらすごくいやだと思いました。もう一つ心に残った川柳が「出征の門標があってがらんどうの小店」という川柳でこれを読んだとき、戦争に無理やりつれていかれるのがとても悲しいと思いました。戦争は絶対これからもやってはいけないと思いました。

●十七文字で残した戦争の怖さ

《武田　竜佑》今回の話を聞いて鶴彬さんはすごい人だとわかりました。鶴彬さんは「戦争」というやってはいけないもののこわさを十七文字で残しています。その一つの「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳があります。鉄砲でうたれて手や足に入った玉のところがくさって、ますいもせずに玉が入った手や足を切られて返したという意味で、とても昔の日本はひどいことだなと思いました。そしてもう一つ「高粱の実りへ戦車と靴の鋲」この川柳は「高粱の実りへ植物をかり取り小屋を燃やし、かり取りをじゃました人がじゅうで殺されるという川柳です。この川柳もざんこくだなと思いました。こんな川柳を残した鶴彬さんは宝だと思いました。これからは戦争のない時代にしていきたいです。

●捕まる時代に言った鶴彬の勇気

《田中　愛星》鶴彬さんの話を聞いて、鶴彬さんはペンネームで本当の名前は喜多一二だと初めて聞きました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という句で、もいだとはとるという意味で丸太とはますいなしで手や足を切ってもう何もできないから丸太みたいになって日本に返すという意味なのだと分かりました。ますいなしで切るということは、とてもかわいそうだと思いました。鶴彬さんは戦争をにくんだり、うらんだりしたと分かりました。戦争は、絶対にしてはだめだとずっと言っていたと聞きました。私だったらそんなこと言ったらけいさつにつかまるから言えないけど、鶴彬さんは勇気がある人だと思いました。戦争に対して否定的な発言をするとその人だけじゃなく町の人や区長さんもつかまると聞いて、言っていないのにつかまった人はかわいそうだなと思いました。

●鶴彬の死を無駄にしないため戦争なくしたい

《松田　千宙》ぼくは、今の時代に生まれてきてよかったと思いました。なぜなら、今日高松出身の鶴彬さんのことを初めて知り、鶴彬さんの生きていた時代は自由に自分の思いや考えを世間に伝えられなかったと学んだからです。鶴彬さんは、戦争に反対して戦争による悲しみや苦しみを川柳に込めてみんなに広めた人です。それによって警察につかまってごう問されて29才でこの世を去った鶴彬さんは命をはって戦争反対をうったえ続けた人でした。ぼくたちは、これからも鶴彬さんのように戦争に反対していかなければいけないと思います。そうしなければ、鶴彬さんは、何のために自分の命をぎせいにしたのかが意味の無いものになってしまうと思います。みんな仲良く、協力して戦争をなくしていきたいと思いました。

●悪いことをしたとき謝れる人になりたい

《森　月海》石川県生まれの鶴彬さんについて勉強してこの時代は戦争がおきていて、敵からのこうげきを受け、足や手に鉄ぽう玉が入るとむりやりもぎとらなければいけないと初めて知りました。この時の人はたくさん悲しくて苦しい思いをしてきたんだと思います。私はこのころ戦争があることを知ってこう思いました。「なぜ戦争をおこしたのかな？戦争がなければこんなくるしむ人なんていなかったと思うのに」と思いました。戦争がおきたのは日本が始めたことだからもしこの時私が生きていたら今すぐあやまりたいです。なぜかというとみんなに苦しい思いをしてほしくないからです。今日学んだことを生かし「悪いことをしてしまったかな」「ちょっとダメだったかな」と思った時「ごめんなさい」とすぐいえるようになりたいです。

訃報

石川県川柳協会会長
本田　一三一（ひさかず）さん（白山市）82歳

令和2年8月25日、ご逝去されました。本田一三一さんは、松任川柳協会会長、番傘川柳会常任幹事、北國新聞の芸術文化評議委員なども歴任。川柳文化発展に尽力され、長年にわたり鶴彬忌川柳大会のご支援もいただきました。また平成28年には顕彰会主催の川柳講座（「はばたき」25号参照）の講師を務められました。ご冥福をお祈りします。

（寺内　徹乗）

―鶴彬・交流の広場―

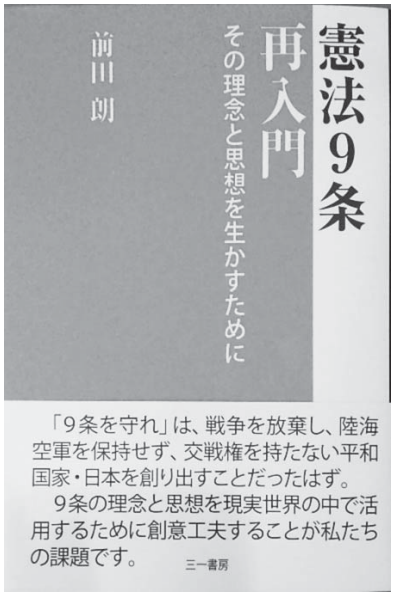
2020年8月24日　前田　朗

「鶴彬を顕彰する会」さま、「はばたき」35号拝受しました。ありがとうございました。

鶴彬の精神を伝えるご努力に敬意を表します。

今年は新型コロナのため、生活も研究も混乱を究めました。オンライン授業に追われる日々です。

さて、このたび『憲法9条再入門』（三一書房）を上梓することができましたので、1冊お届けします。



本書は『刑事法再入門』『パロディのパロディ―井上ひさし再入門』『500冊の死刑―死刑廃止再入門』に続く、〈再入門シリーズ〉4冊目に当たります。また『平和のための裁判』、『戦争犯罪論』、『軍隊のない国家』、『旅する平和学』などの平和学研究のまとめとなります。

＊

今回も東京造形大学の教育研究助成金を得て出版にこぎつけました。30年在籍した東京造形大学から15回ほど出版助成金をいただくことになりました。2021年3月に定年退職を迎える最後の年にもかかわらず、教育研究助成金を支給されるのは、珍しいのではないかと思います。東京造形大学に感謝です。おかげで28冊の単著を世に送り出すことができました。「毎年1冊単著を出す」との公約は実現を果たせませんでしたが、なかなか健闘した部類に属するだろうと思っております。

＊

思い起こすと、憲法9条をはじめて読んだのは、小学校4年生。教師が、〈憲法9条〉と〈札幌市民憲章〉を読ませてくれた時でした。後者には納得したものの、前者には納得しなかった私です。高校時代、自衛隊違憲を訴えた長沼訴訟の札幌地裁判決がありました。高校3年生の私は「平和主義は良いが、憲法9条は私たちがつくったものではない」と考えました。「押し付け憲法論」ではありません。「1946年憲法から30年にもなろうとしている。いまいる世代は憲法制定と関係ない。世代交代とともに、憲法改正をするか、選び直しをするべきだ」と考えていました。私なりの「憲法制定権力論」です（実は、この思いはいまも、ないわけではありません）。ともあれ、文学志望をやめて、法学部に進み今日に至ったのは、長沼訴訟のために違いありません。

＊

もう一つの研究の柱であるヘイト・スピーチ法研究についても、そろそろまとめをしなくてはなりません。定年退職後の最初の仕事にしようと思います。

憲法や法学分野以外では、「非国民研究」にも力を入れてきました。『非国民がやってきた！』及び『国民を殺す国家――非国民がやってきた！2』で、閉塞する国家と社会に異議申し立てをした幸徳秋水・菅野すが、金子文子・朴烈、石川啄木、槇村浩、小林多喜二、長谷川テルなどとともに、鶴彬も取り上げました。非国民をつくり出す国家と社会を、人間らしい社会にどう変えていくかが課題です。

ではまた。

秋からは教室で授業ができるようねがいつつ八王子の研究室にて　前田　朗

前田　朗（まえだ　あきら）1955年札幌市生まれ。中央大学法学部、同大学院法学研究科を経て、現在東京造形大学教授。朝鮮大学校法律学科講師。専攻は刑事人権論、戦争犯罪論。日本民主法律家協会理事、日本友和会理事、救援連絡センター運営委員、国際人権活動日本委員会運営委員。

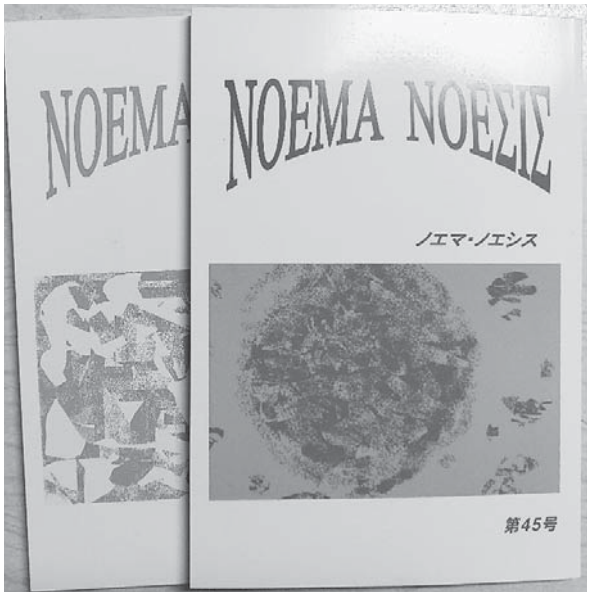
ノエマ・ノエシス　高鶴礼子様からのお便り

鶴彬を顕彰する会様

突然、このようなご連絡をさせていただきます無礼を、どうか、お許しください。

私儀、鶴彬を心から愛する者で、高鶴礼子と申します。

角島様がご存命の折、交換誌という形でのご交誼を賜り、拙主宰の川柳誌『ノエマ・ノエシス』をご恵贈申し上げておりました。何年か前に一度、角島さんからご依頼を受け、御会様ご建立の句碑に刻まれた鶴の句の文言について、岳俊さんから物言いがあったとお聞きし、御会様の建てられた句碑の文言の正当性を示すための拙論考を、貴紙様に書かせていただいたこともございましたが、角島さんがお亡くなりになられてから、貴紙様のご送付も途絶え、弊誌をどちらにお送りしてよいのか、わからなくなってしまいましたこともありまして、ご寄贈を中断いたしておりました次第です。



このたび、乱鬼龍さんより、貴紙35号をご恵贈いただき、おお、ご健在でいらしたのだ、と、とても嬉しくなり、懐かしさでいっぱいになりながら、拝させていただきました。

弊誌45号ならびに44号をお贈り申し上げます。よろしくご査収下さい。

もし、可能であれば、なのですが、ふたたび、交換誌として、ご交誼を賜ること叶えば、幸せです。

鶴彬には、人一倍、惚れ切っておりまして（笑）、修士論文で格闘させていただいた後も、私なりに研究を続けさせていただいております。角島さんが、句碑の句のことで困っておいでだった時に、裁かせていただくことができましたのも、修論のために必死で集めた昭和12年代刊行の『川柳人』誌あってこそのことでした。

貴紙今号の、乱さんのインタビューに登場するレイバーネットさん主催の「崖っぷちの時代と川柳」のシンポジウムでは、パネラーとして、宇部さんや寺内さんとご一緒させていただきましたのも、懐かしい思い出です（笑）。

交換誌としてのご交流を、ふたたび、叶えていただけますかどうか、なにとぞ、よろしくご検討ください。（ダメな場合は、あきらめますので、どうか、ご遠慮なく、お申し付けください。）

このような形で、唐突なるお願いを申し上げてしまいましたこと、誠に申し訳ありません。

お世話をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

２０２０年９月８日

ノエマ・ノエシス　高鶴　礼子

＊「顕彰する会より、ぜひ交流をと返答する」

鶴彬を顕彰する会様

ご丁寧なお便り並びに貴紙『はばたき』35号『鶴彬川柳大賞入選句の栞』24・25集をご恵贈下さいまして、ありがとうございました。

ご交流いただけますこと、嬉しくてなりません。

どうぞよろしくお願いいたします。

顕彰する会の皆様が、こうして鶴彬のためにご尽力下さっていて有り難く、心強く思っています。

（後省略）

２０２０・10・22　高鶴　礼子

高鶴　礼子（たかつる　れいこ）１９５５年三重県生まれ。早稲田大学卒。埼玉大学大学院修士課程修了。同博士後期課程在籍。近現代川柳論。時実新子に師事し、川柳を学ぶ。２００５年、川柳誌『ノエマ・ノエシス』を創刊・主宰。川柳・男女共同参画・人権の分野で講師として活動。「セミパラチンスクの少年」が第34回詩人会議新人賞を受け、非定型の詩の創作を始める。ノエマ・ノエシス主宰。全日本川柳協会常任幹事。日本文藝家協会会員。日本詩人クラブ会員。

サンデーコラム

非戦の川柳　貫き通した鶴彬

黒野　こうき

美濃加茂市の川柳家・東野大八さんから川柳のお話を伺っている時であった。「黒野君、鶴彬は川柳界の宝物、宝石だよ」とおっしゃった。そんな大八さんから鶴彬（本名・喜多一二）の本をお借りして一読すると、涙があふれてきた。

手と足をもいだ丸太にしてかへし
胎内の動き知るころ骨がつき
万歳とあげて行った手を大陸において来た

戦時色の濃い時代にこのような句を句作していた川柳作家がいたとは、まさに驚きであった。大八さんは折々に、川柳の社会的評価、位置をせめて俳句と同じレベルにしたいとおっしゃっていた。私もそれまで漠然と、川柳を俳句と比べて低く見ていたような気がする。鶴彬との出会いは、私のそんな勝手な固定観念を一変させた。5・7・5を詩人の一人としてたしなむ私の視線が、鶴彬の存在を知ったことで川柳の方へと傾いていったのである。

かねてからの念願であった鶴彬の生まれ育った石川県高松町（現かほく市）を訪ねたのはこの夏のことであった。現地で事前に教育委員会から紹介していただいた「鶴彬を頭彰する会」の小山広助さん、遠田勝良さんのお二人と待ち合わせ、最初に訪ねたのは高松歴史公園にある句碑であった。当時の国家に反し、非戦の姿勢を曲げず、己の信念を貫き通した鶴彬の生涯は、現在では高松町の誇りなのであろう。

次いで鶴彬の墓碑、句碑がある浄専寺へ。鶴彬は治安維持法で2度拘束され、1938（昭和13）年9月1日に赤痢となって死去（赤痢菌を投与されたと言われている）、その遺骨は当時盛岡に住んでいた鶴彬の兄・喜多孝雄が引き取り、盛岡市の光照寺に埋葬された。2018（平成30）年にその一部が分骨されて浄専寺に墓碑ができたのである。

続いて鶴彬の養子先・喜多義教さん宅にある句碑、たかまつまちかど交流館の鶴彬資料室を見学する。鶴彬は1908（明治41）年12月末、石川県の高松町に生まれるが、戸籍上は翌年1月1日生まれとなっている。上京して自由労働者として働きながらプロレタリア川柳の道を歩み、「僕はむしろ頭脳で考えるよりも胃袋で直観したのである」と語り、川柳を武器に庶民の立場で社会を見つめようとした。小林多喜二が東京築地署で虐殺されたのは鶴彬24歳の時である。

帰路、金沢市・卯辰山公園にある「**暁を抱いて闇にいる蕾**」の句碑を見る。まるで鶴彬自身を詠んだ句ではないか。まさに鶴彬は川柳界の宝物、宝石である。

……

くろの・こうき　1952年生まれ。
画家、詩人、地方史研究家。
「くろの美術教室」運営、詩誌「ききりん」主宰。大八文庫代表。著書に「円空山河」「岐阜の岡本一平」「播隆入門」など。

発行されました

「救援川柳句集」

獄中からの川柳　乱　鬼龍編

笠原　眞弓（千葉県）

この本、獄中の人が主に投句している機関紙の川柳をまとめたもの（乱　鬼龍編）。救援連絡センターという存在を知ったのは1980年代の終わり頃だった。70年安保だか、学生運動だかで、逮捕者がたくさん出て、彼らを救済するために組織されたものと聞いた。

「川柳」ということで、編集の手伝いをすることになり、急に身近になった。新橋のひどい

ビルもおなじみになった。

句は、なかなかこれが面白い。トップの句が

●新入りの看守早くも風を切り　　烏

で、次のは笑っていいものか悩むが、

●転職誌買って読んでる死刑囚　白壁の理不尽大王

なんだか本当だねと、相槌打っちゃうのが次の句。

●あの世でもこの世は地獄という噂　星の砂時計

〝塀のあっちもこっちも変わらず生きにくい〟という句がいくつかあった。

と、まぁこんな感じで、あなたのお気に入りを探しながら、楽しんでください。

●@500円＋〒76円

●メールでも注文可

kyuen2013@gmail.com

● fax: 03-3591-3583

● 住所：105-0004　港区新2-8-16-3583

東京が燃えている！

連日、官邸や国会周辺は戒厳状態
経産省前はテントに市民が集まる

安倍総理が退陣し、官房長官が新しく総理に出世、菅総理が誕生した。

菅総理は組閣にあたり、安倍政権の継承をうたい、党内派閥からの推薦で各大臣を配置した。

その内閣発足直後に事件発生。日本学術会議委員の任命で、学術会議が推薦した6名の任命を拒否。理由は一切説明せず、「総合的、俯瞰的に判断した」と言うだけ。学問に政治の介入を許すな！　の世論が巻き起こり、官邸、国会周辺では連日続く「騒動」になっているとのこと。

警察が道路のあちこちで職務質問。旗やプラカードを持っている人は軒並み阻止され、一般市民も簡単に近寄れないそうだ。東京に住む方の話＝「若い警察官の〝職質〟の練習をやっている　んだよ。

新しい東京の観光はスカイツリーではなく、官邸周辺や経産省前の反原発テントひろばへどうぞ！」と言われた。

このテントは、10年続く「経産省前テントひろば」で、毎日のように市民が集まっている。ここでは乱鬼龍氏のムシロ旗が立つ。

10月17日には、中曽根元総理の葬儀が1億円の予算で内閣と自民党合同葬儀。異様な雰囲気で行われ、これも戒厳的警備で行われた。

かように東京は異常、異様の連続。どれもこれも戦後最悪の安倍長期政権とそれを継承する菅政権のなせるところ。

川柳の世界では、今年は井上剣花坊生誕150周年。全国14の著名な川柳結社の代表が選者となる大がかりな誌上川柳大会が開催される。「川柳人社」「東京川柳会」が共同主催する。

（渡辺 寛@和川柳社・周 立東爺）

※写真は、ネットの画像から。

◆2021年度　総会

・日時／2021年1月23日(土)開会
　午後1時半～4時半
・場所／高松産業文化センター・中ホール

◆2021年度事業活動方針（案）

2021年1月1日～2021年12月31日

■第10回鶴彬のふるさと「高松歴史街道フェスティバル」

＊期間9月5日～9月12日（顕彰期間）

1　第4回「墓碑法要の集い」
・開催／9月12日(日)　・会場／浄専寺
・時間／午前10時～閉式10時半

2　第23回鶴彬をたたえる集い「碑前祭」
・開催／9月12日(日)　・会場／歴史公園
・時間／午前11時～閉会11時半

3　第9回鶴彬のふるさと
「高松歴史街道フェスティバル」
・開催／9月12日(日)
・会場／高松産業文化センター大ホール

＊第8回かほく市民川柳祭
・時間／受付　午後1時～
「あんどんの灯りで／入選作品展示」
＊開会／1時半（市民川柳表彰式）
＊アトラクション／2時半
＊閉会／5時～後整理（準備は前日午後1時～）

4　「鶴彬」鶴彬冠川柳大会
①第8回かほく市民川柳祭
・作品募集期間6月1日～7月10日
・表彰式9月12日　フェスタ会場
②第26回鶴彬川柳大賞　8月29日(日)
・作品募集期間6月1日～7月31日
・発表、表彰式は忌大会
③第34回鶴彬忌川柳大会
・日時／8月29日(日)午前9時～
・会場／高松産業文化センター

5　鶴彬普及活動
①「鶴彬通信はばたき」
・3回発行予定　4月、8月、12月
②資料展　・9月　高松産業文化センター
　・11月　市内公共施設展示場
　・1月　県展示施設
③資料室の活用
・展示資料整備・運営、見学の対応、物販活動

会員募集　（随時受付）
年会費　2,000円（団体3,000円）

「鶴彬通信　はばたき」
購読料　1,000円/年
郵便振替口座　00740−5−75480
加入者名　鶴彬を顕彰する会

■発　行　鶴彬を顕彰する会
■事務局　〒929-1215
石川県かほく市高松キ5
（小山　広助 気付）
■TEL・FAX　076−281−1201
■E-mail：turuakira@yahoo.co.jp
■ホームページ：http://tsuruakira.jp/

編集後記

鶴彬を顕彰する会事務局　平野　喜之

新型コロナの流行により、鶴彬を顕彰する会の活動も大幅に制限されることとなりました。しかし、前号の「はばたき35号」で実行するとお知らせした三つの行事（第22回　鶴彬をたたえる集い／碑前祭、第3回　墓碑法要の集い、第25回　鶴彬川柳大賞）は、何とか無事終えることができ、正直ホッとしています。

この「はばたき」は創刊号以来、ずっと角島広治さんの驚異的な編集能力と並々ならぬ情熱によって発行されてきました。その角島さんが倒れた後、角島さんが最も信頼されていた寺内徹乗さんがたった一人で編集しておられました。寺内さんが担当されて出された「はばたき」を見ますと、編集だけでなく、ほとんどの原稿もまた寺内さんが請け負われていることが分かります。ご自身の仕事に加えて3人の子育ての中、一人で講演の文字起こしや執筆や編集作業をされていたということは非常に過酷だったと思います。

今年の7月から私が編集を担当させていただくことになって、角島さん、寺内さんがどれほど大変だったかを実感するに至りました。ただ幸いにも現在は、ラインでお互いに情報を交換したり、編集会議もたびたび開かれるようになり、講演の文字起こしや原稿の執筆などの仕事を分担する体制ができて、私の負担は皆さんのおかげでとても少なくて済んでいます。

私ごとですが、早いもので娘が来年で高松小学校6年生になります。今年は叶いませんでしたが、来年度は宇部功先生にぜひ、高松小学校で鶴彬の授業をしていただけるように行事を組むことを念願している次第です。